

図書館のスピーカーから『蛍の光』メロディーが聞こえてきた。僕がいるのは、市営の図書館の中にある勉強用のスペース。机の上には、大学受験のための参考書や過去問集が置いてある。僕の名前は、茂井須文也（もいすふみや）。高校二年生。今は三月なので、受験まで一年をきっている。

放課後、予備校の自習室で勉強をしていた。けれど、どうにも集中が続かなかった。そこで、少し気分を変えようと、自宅の近くにある図書館で勉強をすることにした。ただ、結局集中できないまま閉館時間を迎えてしまったが。

普段であれば、こんなに集中力を欠くことはない。けれど、明日のことを考えたらどうしても勉強に手がつかなかった。

ポケットからスマートフォンを取り出し、メッセージアプリを開く。昨夜、クラスメイトとのやりとりを表示する。メッセージの最後は、こう締めくくられていた。

〈それじゃあ、あさつて土曜日の十三時ということで
〈オッケー！ よろしくね！〉

よろしくね！ の後にはキャラクターのかわいいスタンプが表示されている。メッセージの相手はクラスメイトの門戸理香（もんどりか）。

メッセージの内容は、駅前で待ち合わせをして映画を見に行くためのやりとり。客観的に見れば、いわゆるデートというやつだろうか。僕は、今まで、女の子と二人で遊びに行ったことがない。明日は、門戸と二人で遊びに行く。そう考えると、気持ちがそわそわして、地面に足が付いていないかのような感覚だ。

ふと気が付くと、周囲の人たちが退館をはじめている。『蛍の光』のメロディーは終盤に差し掛かっている。

僕は、慌てて机の上に広がっている参考書と過去問を鞆に入れ、図書館を後にした。

時刻は、午後二十三時を過ぎたところ。

僕は、自室でノートパソコンに向かっている。パソコンは、お年玉を貯めて中学生のころに買ったものだ。型落ちで定価よりかなり安かった。

パソコンの画面には、ワープロソフトが表示されている。内容は、自作の小説。小説と言っても、練習のつもりで書いている短編だ。

パソコンの横に百円ショップで買ったノートが置いてあり、作品のあらすじや登場人物に関する設定が書かれている。それを基に、文章を考えて打ち込んでいる。

なぜ、こんなことをしているかと言えば、将来、小説を書くことを仕事にしたいと思っているからだ。

大学も文学部のある学校を志望校にしている。ただ、直近の模試では、第一志望の学校がD判定だった。

現状を考えれば、もつと受験勉強に集中をして小説なんて書いていない場合ではない。

それでも、小説の練習や勉強をまったくしないで、受験勉強だけする、という気持ちにどうしてもなれなかった。なので、毎日、受験勉強をした後、就寝前のわずかな時間を小説のための時間に充てていた。

そんな感じで、僕は、国語が得意な文系タイプ。それに対して、門戸は、化学や数学や得意な理系タイプ。門戸は、将来、天文学の研究をしたいと言っていた。

得意なことは正反対だったが、なぜか話が合い、門戸と話をするのは心地よかった。門戸とは、高校一年生のころから同じクラスで、席が近かったこともあり、よく話をするようになった。

僕が思い切って門戸を映画に誘ったのは、二か月程前に、ある「情報」を耳にしたからだった。ある日、クラスメイトの女子二人の「理香の家の引っ越し先、関西の方だって」という話が耳に入ってきたのだ。僕たちが住んでいるのは関東なので、関西に引っ越すということは当然転校するということだ。

僕と門戸が二人で話をしているとき、引っ越しや転校のことは話題にならなかった。門戸が言わないということは、あまり言いたくないことなのかもしれない。無理に聞いて、気まずい雰囲気になったらどうしよう、そんなことを考えたら聞くに聞けなかった。それに、もし引っ越しと転校が本当だったら、その事実を、どう受け止めてよいか分からなかった。

時計に目をやると、二十三時三十分を過ぎている。

明日の待ち合わせは十三時。十二時に自宅を出れば十分に間に合う。僕の普段の就寝時間は、だいたい二十四時から二十五時の間。いつもの就寝時間までは、まだ、少し時間がある。けれど、明日、万が一、寝坊して遅刻したら台無しだ。

すぐに眠れるか分からないが、布団に入っておくことにした。

僕は、パソコンの電源を落とし、ノートパソコンを閉じた。

立ち上がり、ドアの傍にある部屋の電灯のスイッチを押すと、室内は真っ暗になった。

3

時刻は、午後十三時を回ったところ。

場所は、駅前広場。

今日は、朝からそわそわして落ち着かなかった。少し早めに自宅を出発して、十二時三十分には待ち合わせ場所に到着した。

僕の格好は、青いシャツに黒い細身のジーンズ、ローテクのスニーカー。迷うほど服を持っていないので、普段と同じような服装にした。

駅の改札あたりに視線を向ける。改札の向こうに門戸の姿が見えた。門戸は、白いUネックのシャツの上にジーンズ生地のジャケット、ベージュのロングスカート。足元はローテクのスニーカー。肩かけのポシェットを身に着けている。ちなみに髪形は、普段と同じ、セミロングのストレートだ。

門戸は、改札を出て僕を見つけると、小走りやってきた。

「ごめん、待った？」

「全然。来たばかりだよ」

落ち着かなくて三十分前から待ってました、なんて、恥ずかしくて言えない。

普段は制服姿だから、私服姿は何だか新鮮な気分だ。ドキドキしてしまう。

緊張のせいか口の中が乾いてきた。僕はリュックからペットボトルのお茶を取り出し一口飲む。

「私ものど乾いちちゃった」

門戸は、あたりを見渡し自動販売機を見つけると「ちよっとお茶買ってくるね」と、小走りで買いに行った。

脳内で「良かったら一口飲む？」と自分のペットボトルを差し出すイメージが浮かんだ。客観的に見ても、いきなりそんなこと言ったら、気持ち悪い。それに、とてもじゃないが恥ずかしくて言えない。

門戸が「おまたせ」とお茶を買って戻ってきた。

「それじゃあ、行こうか」

僕と門戸は、映画館へ向かって歩き出した。

映画館は、待ち合わせの駅から歩いて五分ほどの場所にある。

駅から直通のショッピングモールに映画館が入っている。十二スクリーンの大きな映画館で、いわゆるシネコンというやつだ。

見る映画は、メッセージで相談をして事前に決めてあった。話題になっているハリウッド映画でジャンルは宇宙を舞台にしたSFもの。十四時三十分からの回だ。

映画館に入ると、ポップコーンの甘い香りが漂ってきた。この香りを嗅ぐと「映画館に来た」という気持ちが高まってくる。館内の上部に設置されたモニターには、公開中の作品の予告編が映し出されている。

土曜日ということもあってか人が多かった。子どもを連れた家族や、僕と同じぐらいの高校生もいる。傍から見たら、僕と門戸もカップルに見えるのだろうか。

僕と門戸は券売機へ向かう。本当はインターネットで先にお買えばよかったのだがクレジットカード決済しかできないので買うことができなかった。

券売機のタッチパネルを押して作品を選択する。

見ようと思っていた映画は、上映会数が多いこともあってか、土曜昼の割には、そこまで席が埋まっていなかった。

「席、どのあたりにしようか」

「私は、いつも真ん中あたりで見えるよ。真ん中か端っこだったら、真ん中の方がお得な感じしない？ 茂井須くんは？」

「俺は……、端っこが多いかな。トイレ行きたくなったら、すぐ行けるようにとか考えて」「そっか。私は、端っこの席でも、どっちでも大丈夫だよ」

「いや、でもせっかくだから、真ん中の席にしよう。まだ、空きがあるし。それに、どうせなら、お得な方が良いし」

門戸は「くすっ」と笑ってくれた。

僕は、中列真ん中あたりの座席を二席選択する。

画面が入金画面に切り替わる。僕は、鞆から財布を取り出す。

門戸もポシェットから財布を取り出したので「いいよ、俺が誘ったんだから」と言ったが「うん、自分の分は自分で出すよ」とお金を手渡された。

こういう時、どうするのが正解か分からなかった。お金を持ったままやり取りするのもカッコ悪いと思ったので、素直に受け取ることにした。

チケットが二枚発券され取り出し口に出てくる。一枚を門戸に渡した。

「上映まで一時間ちよつとあるから、専門店街の方回ってみる？」

「いいね、そうしょ」

僕と門戸は、映画館を出ると、ショッピングモールの専門店街へと向かった。

専門店街には、様々な種類の店舗が入っている。アパレル、美容品、おもちゃ、レストラン街……。

何を買うでもなく、お店に並んでいる商品を見ながらあれこれ話をした。

門戸が、特に気に入ったのは、クッション専門店にあった宇宙人の形をしたクッションだった。頭が大きくて、体が小さい。色合いは銀色（を意識したグレー）。目がとても大きく描かれていて、人によって好みが分かれそうなデザインだ。頭の部分を、もふもふしながら「この何とも言えない表情よくない？」と楽しそうにしていた。

脳内で「今日の記念にプレゼントするよ」なんてイメージが浮かんだ。何気なく値札を見た瞬間、ギョツとなった。ギリギリ手持ちで買えないこともないが、僕の財布がすっからかんになってしまう。

スマートフォンを取り出し、時間を確認すると、十四時十分を過ぎたところ。

「そろそろ、映画館に戻ろうか」

「もうそんな時間？ いつの間に」

門戸は、もう少し遊びたい子どものような表情をしていたが、名残惜しそうに宇宙人のクッションを元の場所に戻した。

映画館に戻ると売店コーナーに並んだ。

売り場の上部に備え付けられたメニュー表を見ながら、どれを買うか考える。

僕は思い切って提案を試みることにした。

「違う味のポップコーンを買って、食べ比べとかしてみる？」

「あ、いいかも。そしたら、私はキャラメル味にするから、茂井須くんは塩味ね」

「オッケー」

僕と門戸は、飲み物とポップコーンを購入し、そのままスクリーンへ向かった。

チケットを見ながら、座席を探し着席する。

僕は、映画が始まる前の時間が好きだった。座席について、いろんな映画の予告編を見ている時間は胸が躍る。

僕は、声のボリュームを少し落としてそつと話しかける。

「なんかさ、上映前の雰囲気って良いと思わない？ この雰囲気すごく好きなんだ。わくわくするというか」

「あ、分かるかも。遊園地行ったときのアトラクション待ちの時間とかに似てるよね」
館内が薄暗くなった。

門戸がスクリーンを見たまま「はじまるね」とささやき声で言った。

ささやき声は、優しく僕の耳に届き、くすぐったさを感じた。

スタッフロールが終わり、館内が明るくなった。

映画の内容に関しては、良かったと思う。宇宙映画によくあるストーリーだったが、戦闘シーンの映像は迫力があつた。

ただ、隣に門戸がいるということが頭を離れず、いつもより映画の世界に入りきれなかったけど。

ポケットからスマートフォンを取り出し電源を入れる。時間を確認すると、十六時三十分五分。

僕と門戸は、映画についての感想を言い合いながら、映画館を出る。「おやつでも食べていこう」ということになり、駅前にあるチェーン店のカフェに入った。

映画の感想や、学校でのことなど、あれこれ話をした。

本当は、今日、転校について聞いてみたかった。本当に転校するのか、いつ引越すのか。ずっと気になっていた。

結局、転校について聞けないままカフェを出ることになった。時間は十八時を過ぎたところ。

僕と門戸はカフェを出て、駅の改札口へ向かって歩いていく。

「今日は、ありがとう。このところ、ずっと受験勉強ばかりだったから。映画誘ってくれてよかったよ」

門戸の笑顔を見ていると、楽しい雰囲気壊したくないと思ってしまう。けれど、聞いておかないと、きつと、後悔してしまう。

僕は立ち止まった。門戸も「忘れ物？」と立ち止まった。

「あのさ……」

「ん？」

門戸は「どうしたの？」という表情で僕を見ている。

僕の心臓は普段の倍以上のスピードで鼓動している。言葉が、のどのあたりでつかえている。唾を飲み込み、何とか、声を、絞り出す。

「……門戸、引越しするの？」

門戸は、少し目を見開いて、僕から視線を外した。

「……えーと、誰から聞いたの？」

「あ、いや、クラスの女子が話してて。たまたま聞こえちゃったんだ」

門戸は「そっか」とつぶやくと、遠くの方を見たまま黙り込んでしまった。

やはり、本当は話をしたくないようなことだったのだろうか。

僕は「変なこと聞いてごめん」と言おうとしたとき、門戸が口を開いた。

「ねえ、ちよつとだけ、歩かない？」

4

僕と門戸は、改札へ向かわずに駅を後にした。

お互いに何も言わないまま、歩き続けて、駅からはどんどん離れてしまっている。

門戸には、どこか目的地があるのか、歩く足は淀みなく動いている。駅を離れ、周りの

風景は、商業施設やオフィスビル群から住宅街へとかわっていく。

門戸の住まいは別の市のはずだが、土地勘があるのだろうか。

「この辺ね、よく知ってるの。小学四年生のころまで住んでたから」

僕の心のうちを察したわけではないだろうが、タイミング良く門戸が口を開いた。既に二十分は歩いているだろうか。

「今、どこに向かっているの？」

「もう着くよ」

それから、三分ほどで門戸が足を止めた。

「ここだよ」

門戸が立ち止まったのは、マンションの前だった。壁面は赤レンガ風のデザイン。築二十年から三十年といったところだろうか。一番上の階は、六階から七階、という高さ。ぱつと見、ファミリー向けの中規模なマンションといったところだ。

「ここね、私が昔住んでたマンションなんだ」

門戸は、エントランスをくぐり、エレベーターのボタンを押す。

「勝手に入って大丈夫かな」

「オートロックじゃないから大丈夫だよ」

僕が確認しなかったことは、微妙に違う角度の答えが返ってきた。

門戸が「昔」住んでいるから大丈夫、と自分に言い聞かせ無理やり納得する。幸い、他の住民の姿はない。

エレベーターに乗ると、門戸は「七階」のボタンを押した。ボタンが黄色く点灯する。ボタンの配置を見ると、どうやら七階が最上階のようだ。

七階に到着する。エレベーターから少し歩いたところに階段があった。階段を登ると扉があった。おそらく屋上に出るための扉だろう。扉の前には「進入禁止」を表わすポール二本とチェーンが置いてあった。

「ここからね、屋上に出られるの」

「屋上……いいのかな」

「鍵はかかってないはずだから、大丈夫だよ」

そういつて門戸は、チェーンをまたぎドアノブに手をかける。扉は難なく開いた。

僕が確認しなかったことは、微妙に違う角度の答えが返ってきた。

鍵がかかっていなかったから大丈夫、と自分に言い聞かせ無理やり納得する。幸い、他の住民の姿はない。

屋上に出ると、夜空が目に入ってきた。ただ、こんな住宅街では、一面の星空なんてものはなく、二つ、三つの星がキラキラしているだけ。

他に見えるのは、月。月は、太った三日月の姿をしている。本当は正しい呼び方があるのだろうが、僕はあまり詳しくないので分からなかった。

門戸は、端まで行き柵に手をかけ、階下を見下ろした。僕も隣に並び、階下を見下ろす。

周りにはある建物はマンションよりも低いため、近辺の様子が一望できる。マンションの隣には小学校があった。屋上から、ちょうどプールも見える。

プールには水が張られていた。まだ、プール開き前だろうか、水は緑色で濁っていた。

水面で、少し太った三日月がゆらゆらと揺れていた。何だか、月が躍っているみたいだな

と思った。

「ここね、引っ越しした後でも、たまに来るんだ」

「良い場所だね」

僕たちは、しばらくの間、何も言わずに風景を眺めていた。穏やかな風が吹いている。お互いに言葉を発しないが、とても心地よい時間だった。

「ねえ、茂井須くん。さっきの話だけど……」

しばらくして、門戸が不意に口を開いた。

「私ね、引っ越しするんだ」

「そっか……。いつ、引っ越しをするの？」

「六月ごろ。お父さんが大阪の事務所に転勤することになって。それに伴って私も、って感じ」

ある程度、心構えはしていたとはいえ、本人の口から事実を聞かされると、寂しい気持ちになった。胸の奥がじんわりと痛い。それに、大阪となると、新幹線で三時間かかる。気軽には行ける距離ではない。

でも、連絡ぐらいいは、しても良いだろうか。もし、門戸が嫌でなければ。

「何だか、寂しいな。あの、もし良かったら、転校した後も、連絡し——」

「あ、ごめん！ 説明が足りなかったかも！」

「え？」

「引っ越しはするけど、転校はしないよ」

「？」

僕は混乱していた。大阪からわざわざ通うということだろうか。そういえば、以前、テレビで毎日新幹線通勤している人が紹介されていた。門戸も新幹線通勤することだろうか。

「毎日大阪から新幹線で通学すること？」

「ううん、そうじゃなくて。大学生のお姉ちゃんがいるんだけど、お姉ちゃんが都内で一人暮らしをして。で、とりあえず高校卒業するまでの一年は、お姉ちゃんの家に住居させてもらうことにしたの」

転校をしないとわかって、僕の胸に安堵が広がる。

「良かったー。転校しないんだ」

ほっとしすぎて思わず本音が声になる。

「ふーん。どうして良かったの？」

門戸は、いたずらをする子どものような表情で僕を見ている。答えを知っているけど、あえて質問している、そんな表情だ。

「あ、いや、その、また今日みたいに、遊びに行きたいなと思ってたから。……どうかな、また遊びに行ってくれる？ 受験で忙しいけど、合間を縫ってさ」

自分史上ベストスリーに入るような大胆なことを言っている。

門戸は、僕から視線をはずし「うーん」と眉間にしわを寄せている。そして「ごめん」と言った。

僕は、ひとりで舞い上がっていたのだと思うと、恥ずかしくなって顔から汗が噴き出てきた。今、絶対に顔が赤くなっているはずだ。耳たぶまで赤くなっている感覚がある。

何も言わないのは良くないと思い「いや、あの、うん。大丈夫」と声と言葉を絞り出す。「あ、ごめん！ また説明が足りなかった。いつも結論を先に言っちゃうから、説明が足りないってよく言われるのに」

「??」

恥ずかしさでいっぱいの僕の頭では、門戸の言っていることがうまく処理できなかった。「さっきも言ったけど、私、お姉ちゃんの家に住候するの。でも、家族からの条件として、浪人したら両親の家に帰るって約束なの。つまり、現役で合格できなければ、大阪に行かないといけないってこと。でも、志望校は東京の大学だし、できればこのまま関東に残っていたい。だから、絶対浪人するわけにはいなくて、現役で合格したいってわけ」

門戸には門戸なりの事情があったようだ。ただ、話を聞いていると、受験勉強の合間に会うぐらいならできそうだが……。

「そんな事情があったんだ。でも、受験勉強中でも、たまに会うぐらいだったら……」

「ううん、私って、なんて言うか、そんなに器用じゃなくて。この前の模試で志望校がC判定だったし。しっかり勉強したつもりだったから、すごいショックで。もう試験まで一年きってるし、今は受験勉強だけに集中したいの。だから……」

門戸は、一度言葉を切ると、僕に視線を戻してくれた。

「二人とも受験が終わったら、また遊びに行こうよ。いろんなところに。……茂井須くんが良ければだけ」

つまり、受験が終わったら、今日みたいに「デート」できるってことか。

先ほどの恥ずかしさは消し飛び、今度はうれしさがこみ上げてくる。俄然、受験勉強に對するやる気も湧いてきた。

「うん。したら、お互い受験がんばろう」

「ありがとう。……というか、茂井須くんは受験大丈夫そう？」

「……志望校、この前の模試でD判定だった」

「……それって、やばくない？」

「……非常にやばい」

僕と門戸は笑いあった。お互いに伝えたいことを伝えきって、心が軽くなったような感じだ。門戸の笑顔は、柔らかで自然な笑顔だった。

門戸のポシエットからスマートフォンの着信音が聞こえた。

門戸は、ポシエットからスマートフォンを取り出し、画面を見た。

僕は自分のスマートフォンで時間を確認すると、もう二十時近い時間だった。

僕は、多少遅くなっても平気だが、門戸は女の子だし、そろそろ帰らないと家族が心配するだろう。

「そろそろ、帰——」

「ごめん、さっきの話、全部、忘れて」

門戸は僕の言葉を遮って言った。

「え？ それって、どういう……」

門戸が、上を向いた。視線の先にあるのは、空だけ。のはずだった。

視線の先を追うと、何か、光が見える。さらに、モーターが回っている音だろうか、機械の動く音も聞こえてきた。

「どうやら、何かの物体が徐々に近づいてきているようだ。距離が縮まるにつれて、光が強くなっていく。それに伴い音のボリュームも上がっていく。」

「もう何年か後だと思ってたのに。予想していたよりも早い……」

門戸が独り言のようにつぶやく。

「あの、一体何のこと」

門戸は、空から視線をはずし、僕の方を見た。

「茂井須くんが文学が好きだよ。そしたら、かぐや姫って、お話知ってる？」

「もちろん知っている。おそらく文学好きでなくても知っているだろう。日本では、あまりにも有名な物語だ。おじいさんとおばあさんが竹の中からでてきた女の子を育てたが、実は月から来た女の子で、大きくなると月に帰ってしまう。簡単にまとめるとそんなお話だ。」

「あのお話ってね、半分はフィクションだけど、半分は実話なんだよ。あれってね、私たちの先祖様なの」

「……何を、何を言ってるんだ。頭が、思考が追いついていかない。」

この数分で、僕の気持ちは乱高下している。頭も、心も、フル回転しているが、もう追いついていかない。頭と心を置き去りにしたまま、心臓の鼓動だけが、どんどん早くなっていく。

徐々に近づいていた光が、僕たちのいる屋上に近づいてきた。目をこらして、詳細を確認する。

僕の目が捉えたのは、銀色をした大きな立体の長方形だった。外面はなめらかで凹凸がまったくない。大きさは、普通乗用車ぐらいだ。

銀色の長方形が、僕たちのいる屋上に静かに着陸する。ウィーンと音がして、人が出入りできるぐらいの隙間が出現した。隙間から、銀色のボディスーツをまとった人が出てきた。

「門戸里香様ですね」

「ええ」

「お迎えに上がりました」

「予定よりもかなり早いと思うんだけど」

「お父様とお母様に緊急の転属命令が出ました。お父様とお母様は、すでにお戻りになられています」

「……そうだったの。そういう事情なら仕方ないか。お姉ちゃんは？」

「すでに別便でお迎えが行っております」

「わかった。あ、私の荷物は？」

「理香様のお荷物は、すでに梱包を済ませ送っております」

「それならよかった」

銀色のボディスーツの人は、一瞬、僕の方へ視線を向けた。

「この方への記憶置換はどうされますか？」

記憶置換？ 漫画や映画でよくある記憶の操作？ 僕の記憶を操作することだろう

か。今まで門戸と話したことも、今日のことも全部消されてしまうのか。

……そんなの絶対に嫌だ。

どうしたらいい？ 逃げる？ でも、逃げ切れるのか。門戸を説得して残るようにしてもらったら、それで済むんじゃないか。でも、詳しい事情がよく分からない。

僕の頭に、様々な選択肢が浮かぶが、どれもうまくいく気がしない。

「茂井須くんなら、大丈夫。誰にも話さないから」

門戸は遠くへ視線を向け目を細めている。

「全置換が嫌であれば、一部置換もできますが」

「ううん。置換なしで大丈夫」

「わかりました」

銀色のボディスーツの人は、銀色の長方形の中へ戻っていった。

門戸は、僕へ視線を向ける。

僕は、門戸と目が合う。門戸は、口角を上げ笑おうとしていたが、眼からは今にも涙が出そうだった。

「今日は、本当にありがとう。たのしかった。……バイバイ」

門戸は、銀色の長方形の中へ入っていった。門戸が入った直後、ウィーンと音がして出入り口が消えた。

銀色の長方形は、振動をして、わずかに浮上する。そのまま、屋上を離れ、空の向こうへと消えていった。

僕の頭は完全に思考を放棄していた。心臓の鼓動だけは相も変わらず早いままだ。しばらく、夜の空を見上げたまま動くことができなかった。

5

「何コレ！ 私、宇宙人じゃん！」

場所は、ハンバーガー店の二階席。

僕の向かいに座っているのは、門戸理香。

門戸の手には、僕の書いた小説の原稿が握られている。A4のコピー用紙。僕の自宅のコピー機（家庭用）で印刷したものだ。

「でも、茂井須くん、すごいね。私、文章書くの得意じゃないから、尊敬する」

「あ、ありがとう」

不意に褒められて照れてしまう。

「ただ、ひとつ聞きたいんだけど。もしかして、これ賞に投稿する気？ 二人で映画見に行った時のことが書いてあって恥ずかしいんだけど。名前とかそのままだし」

「まさか！ 投稿しないよ。ページ数も全然足りないし。これは、練習のつもりで書いただけだから人には読ませないよ。……門戸以外には」

「そ、そっか。なら、良いけど」

門戸は、少し恥ずかしそうに視線を原稿用紙に落とす。

「ちなみに、賞に投稿する小説は何ページぐらい書くの？」

「賞によってページ数が違うんだけど、僕が投稿しようと思ってる賞は、原稿用紙二〇〇

枚以上だから、字数にすると八〇〇〇字以上になるかな」

「二〇〇枚！ 八〇〇〇字！ お姉ちゃんから聞いた大学のレポートより全然多い！」

「あ、でも、そこまで長い小説書いたことがないから、書きあげられるか、不安もあるけど……」

投稿するための小説を、毎日少しずつ書き進めているところだった。

しかし、短編は練習で何度か書いたが、長編はまだ書いたことがなかった。

「茂井須くんなら、絶対に大丈夫だよ。書き終えたら、一番に読ませてね」

「もちろん！」

ふと、僕は、窓の外に目を向ける。

窓の外では、風が吹くたびに桜の花びらが気持ち良さそうにひらひらと飛んでいた。